22PO-pm400

家伝の薬方書「救民妙薬集」の収載内容に関する検討

○米澤 健[1,2], 堤 順子[1], 小林 啓子[1], 猪狩 恭子[1], 飛永 たまみ[1]([1]杠葉病院薬剤部, [2]長崎大院医歯薬)

【目的】本邦において一般大衆へ書物が普及した江戸時代には庶民を対象とした病気治療書や健康に関する啓蒙書が数多く出版されており、特に水戸藩により作成された「救民妙薬」は民間薬に関する薬方書として広く知られている。演者は曹洞宗寺院の寺族であった祖母より「救民妙薬集」と記された古文献を譲り受けたが、収載内容が水戸藩により 1693 年に作成された「救民妙薬」と大きく異なることを見出した。そこで、収載項目に関する読み下しと内容の分析を試みた。

【資料の体裁】文献は経文折りの形態で枚数は 30 枚分、サイズは縦 17.5 ㎝の幅 240 ㎝、序文の頭に「救民妙薬集 序」の記載があり、奥付は無い。内容は救民妙薬と同様に「大君予に命ずらく……」の序文から始まるが、収載項目は大幅に異なっている。文字は写筆ではなく木版印刷であり、本文は全て崩し字にて記され、一部に虫食いによる文字の欠けが見られた。

【結果と考察】この資料は 91 項目 146 処方から構成され、「救民妙薬（1693 年)」と一致または類似する処方は全体の 2 割程度、残りの内容のうち 7 割は江戸後期に流通した民間薬書である「救民薬方録（1811 年)」、「救民妙薬法（1838 年)」、「救民単法（1858 年)」に一致または類似する処方の記載がみられた。資料に記載の処方の複雑さや文章の長さには大幅なばらつきがあるが、複数の処方について前出の民間薬書の処方と全文一致が見られた。この結果から、薬方書は複数の薬方書を参照して作成し、書名と序文は著名であった「救民妙薬」を借りた可能性が高いことが推測された。